願生の人・清沢満之

――乗托妙用の自覚から避悪就善の意欲へ――

寺川俊昭

一

今年度の臘扇忌にあたり、実行委員を代表して、真宗学会の会長をお勤めくださっている臼井先生から、ご丁寧なご挨拶をいただきました。先生もおっしゃったように、清沢先生がお亡くなりになったのは一九〇三年でありましたから、今年は九一回忌ということになりましょうか。その一月遅れのご命日に、大谷大学の有志がここに集まって、清沢先生の学恩を改めて思い、また先生が果たし遂げてくださったかずかずのお仕事の歴史的意義に思いをいたしながら、臘扇忌を勤めることでございます。

たまたま今月の大学正門の掲示板に、「洪鐘響くといえども、必ず叩くを待ち、まさに鳴る」とありますが、あれは清沢先生もよくご存知のことばでした。年令からいうと先輩にあたる南条文雄先生を評して、「南条先生はそれ洪鐘の如きか」ということばで、「為法不為身」をモットーになさっていた南条先生に対する大きな尊敬の思いを、語られたことがありました。もちろん、小さく叩けば小さく鳴るけれども、大きく叩けば大きく鳴る、こういう意味を託してです。このことを申したのは、私たちが今、九十年前に世を去られた方、しかしながらいろいろな意味で、こ

とに親鸞聖人の教えを学んでいく上で、非常に大きな学恩を感ずる方である清沢先生を思う時に、さまざまな関心で先生をみることができるからです。

例えば、大学という関心に立って清沢先生をみることもできます。仮にこの大学という関心に立っていえば、清沢先生は本学の長い前史である学寮の伝統をうけ継ぎつつ、明治三十四年に〈近代の大学〉の形成を目指して再出発した時の、初代学監でありました。しかしほどなくして学監職も辞せられ、やがて命も終えられました。しかしその高邁な志願は、二代目学長南条文雄先生、三代目学長佐々木月樵先生にうけ継がれていきました。そういうよき継承者をもつことができたことは、本学にとって大変に幸せであったと思います。そのような大学という視点から、日本の私立大学の歴史において独自の教育の理念を高らかに宣言した人として、さらに非常にすぐれた宗教的信念に立った教育者として、清沢満之先生をみることももちろんできます。あるいはもう少し思想的な関心に立って、日本近代において仏教を新たに展開させる非常に大きな跳躍台を形成した人、こういう視点から清沢先生をみることもできます。その他、さまざまな関心から清沢先生をみること、それはもちろんなすべきでありますし、それぞれに意味がありますでしょうが、私が、あるいはここに集ってくださった多くの方がたが、ほぼ共有しているであろうと思われる関心、それはやはり「信念の人」あるいは「純潔な求道心に生きた人」として清沢先生をみたい、こういう関心であり、私はそれが先生に対してもつべき一番基本的な関心であるというべきだと、了解しているものであります。つまり批評家の眼をもって清沢先生をみること、それを私はしないということであります。

真宗大学を開いた人、その意味で私たちにとっては〈学祖〉である清沢先生が、南条文雄先生・佐々木月樵先生というよき継承者を得たように、学道の人、あるいは純潔な求道の心に生きた人としての清沢先生も、この面でよき継承者を得られたように思います。清沢先生は非常に鋭い求道の志をもって生きていかれましたけれども、しかしその求道の志というのは、人間的な面でいえば、生きることに非常に苦しんだということでありますから、容易に癒すこ

とのできない魂の苦悶の中での要求でしょう。それを本当に満たすことができたのは、もとより親鸞聖人の教えを通して、聖人が生きた信念に触れることができたという、この一事によってであります。そのような、親鸞聖人を魂の師と仰いだ清沢先生の、親鸞聖人によって得た知見を自覚化していくという面でのよい継承者を、やはり清沢先生は得ておられるのです。これについてはもちろん、私たちにとって先輩である幾人かのお名前をあげることができますけれども、自分にとって一番深い学恩をいただいたお方をあげて代表させていただきますならば、それは曾我量深先生であります。

清沢先生のあの、親鸞聖人の教えによって生きるのだという信念を思想化して、浄土真宗の歴史において清沢先生が改革的に生み出された知見を自覚化した先輩が、曾我量深先生でありますが、その曾我先生がおもちになった親鸞聖人の仏教に対しての、私たちにとって非常に示唆深いご了解があるのです。それは、浄土真宗の仏道としての積極的性格を、どのようなものとして了解すべきであろうかという問いに対して、曾我先生は「願生浄土の自覚道」であるとおっしゃった、その知見です。そのことをいわば主題的に考察なさった、非常にすぐれた先生の講話があります。それが『本願の仏地』と題された講話ですが、昭和二年、広島市の法正寺でなされた講話の記録です。

この、曾我先生の講話の代表的なものの一つであろうかと思われる『本願の仏地』に、先生は「宗教的信が内に展開する願の世界」という副題をおつけになっています。その副題がよく示しているように、私たちがよき人の教えに出遇うことによって、一つの宗教的信念を獲得するのでありますが、これはもちろん世親が「一心帰命」と表白した信仰的自覚であります。ところがこの一心帰命の信は、一心帰命の信にとどまることなく、直ちにそして自然に、一心願生の信として相続し展開しくいくのである。こういう知見を、力をこめて語っておいでになります。例えばこのような代表的講話にもよく示されているように、真宗の仏道としての積極的性格を、願生浄土の仏道として顕揚する。浄土真宗は、往生浄土の仏道であるというだけではなくて、むしろ願生浄土の仏道、あるいは願生浄土の自覚道と解

すべきである。これが曾我先生の大切な意味をもつ、そしてまことに積極的な真宗のご了解であろうかと思うのです。曾我先生にこのような真宗の理解、あるいは真宗がいのちとする本願の信の積極性、これを尋ねあてていく一つの縁となったもの、それが清沢先生が悪戦苦闘のあげく獲得するに至られた信念の表白であったに違いない、こう私は了解するものであります。

二

清沢先生が苦しむことの多かった人生の中から、初めて、「我は如来を信ず」ときっぱりと表白できるような確信をおもちになることができたのは、明治三十一年の秋、先生が三十六歳の時であったと了解しております。またあとで触れますけれども、先生はあのよく知られている「自己とは何ぞや、これ人生の根本的問題なり」、こういう問を自分自身に問いかけられ、それをめぐって思いをめぐらす中から、

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの境遇に落在せるもの、即ちこれなり。

と表白された、あの信知が獲得されていきました。それが、先生における信念の確立を告げる表白であると、私は了解するのです。

それをめぐって、実は気がつくのが大変に遅かったのですが、数年前に改めて気がついたことがあります。この表白はよくご承知のように、

吾人は寧ろ只管、絶対無限の吾人に賦与せるものを楽しまんかな。

と結ばれています。ところがここで切ってはいけないので、行はかわっていますけれども、それにすぐ続いて、

絶対、吾人に賦与するに善悪の観念をもってし、避悪就善の意志をもってす。吾人は喜んでこの事に従わん。何ものか善なるや、何ものか悪なるや。……。

と、表白が続くのです。その全部を含めて、先生における信念の確立を吐露されたことばと読むべきである。実は数年前に、やっとこのことに気がついたのです。

ここに、「絶対、吾人に賦与するに善悪の観念をもってし、避悪就善の意志をもってす。吾人は喜んでこの事に従わん」という、信念が改めて開いてくる強い意欲が述べられております。これを曾我先生は自らの真宗の学びの中で、真宗の伝統的なことばによって、〈一心願生の信〉として了解していかれたのです。そしてそのような積極性をもった信仰的自覚として、如来に目覚めた「一心帰命の信」は展開し生きられていくのだ、こういう了解を形成していかれたに違いない。このように私は考えたのですが、「願生の人・清沢先生」という題を掲げたのは、そのことを申し上げたいと、しきりに考えていたからであります。

清沢満之先生、この方を私は純潔な求道の志に生きた人、当然のこと、純潔な信に生きた人と仰ぐものであります。それでは、その信念に生きた人と仰ぐべき清沢先生における信念の確立は何時であったのか、このことに私は強い関心をもつものですから、問わずにはおられないのです。それについて、先生の最晩年の日記として『臘扇記』と『当用日記』とがあります。その『当用日記』に、有名な「往事回想」という見出しの一文がしるされております。その中に、

回想す。明治二十七・八年の養痾に、人生に関する思想を一変し、ほぼ自力の迷情を翻転し得たりと雖も……。

と、先生はしるしています。先生自身が、明治二十七・八年にわたる養痾の中で、人生に関する思想を大きく変えた、こう語っているのです。いうまでもなくこの「養痾」というのは、あのミニマム・ポシブルを実験した禁欲生活によって先生ははからずも肺結核を患う身となり、そのために、垂水に転地療養をしなければならなくなったのですが、それを指しています。その療養生活の中で、自力の迷情をほぼ翻すことができたといわれるのですけれども、この自力を迷情と知って他力に眼を開いたその時が、清沢先生における信念確立の時であろう。こう理解するのが、一般で

す。これは西村見暁先生の『清沢満之先生』以来、多くの方がだいたいおもちになっている見解であります。

ご存知と思いますが、明治二十七・八年といいますと、今の東本願寺の両堂が再建された直後の頃です。時はあたかも日清戦争のさ中でしたが、完成した両堂は木の香も新しい頃でした。その頃、ご法主であった厳如上人が亡くなられ、二月にそのご葬儀が行われました。皆さんはその当時のことをほとんどご存知ないだろうと思いますから申し上げておきますが、現在、七条警察署があり近鉄百貨店がある辺りが、東本願寺の両堂再建の作事場、つまり全国から運ばれてきた巨大な原木を、柱とか梁とかに仕上げていく作業場であったのです。再建の工事はほぼ終っていますから、そこを片づけて葬儀場とし、厳如上人のご葬儀が執り行われました。その葬儀に、当時の真宗大学寮の学生及び真宗京都中学校、現在の大谷高校の生徒が、教職員もともども全員頭を剃り、黒衣墨裟袈で参列いたしました。清沢先生も真宗大学寮の教員として、頭を剃って参列なさったのですが、先生はすでに禁欲生活を始めていますので、今でいう栄養失調に近い体調になっています。当日は寒のさ中、寒風の吹きすさぶ中での二時間にわたる葬儀であったといいます。それで全員風邪をひき、〈大谷風邪〉といわれるような状態になりました。

清沢先生もその〈大谷風邪〉にかかられたのですが、栄養失調状態になっていた身体に風邪をひいたものですから、それがこじれて肺結核の初期状態になっていかれたのです。それで、友人の強い勧めによって垂水に転地療養をなさる。それが「明治二十七・八年の養痾」なのです。その中で、先生は非常に悩まれました。つまり高い志をもって、しかも新進気鋭の哲学徒として、仏教の真理性を明らかにしていきたいという、非常に大きな抱負もあったでしょうし、気慨もあったでしょう。そういう高い志をもって研究生活を進めていた矢先に、肺結核という治る期待のもてない病気に犯されてしまったのです。おそらく、非常に深刻な挫折を体験なさったに違いありません。先生はずいぶん苦しまれたと思いますけれども、その苦しみに負けないという非常な気迫をもっておられました。その気迫をどこに感ずるかといいますと、先生の療養中の日記が『保養雑記』でありますが、その中に『和漢高僧伝』を抜き書きして

おいでになる、そこからです。例えば善導大師について、次の文がしるされています。

導、堂に入れば、則ち合掌し跏跪し、一心に念仏す。力つくるに非ざれば、休まず。

三十余年、別の寝処なく、暫くも睡眠せず。洗浴を除くのほかは、曾て衣を脱がず。般舟行道、礼仏方等、もって己れが任となす。戒品を護持し、纎毫も犯さず。曾て目をあげて女人を視ず。一切の名利、心に起念することなし。綺詞戯笑、また未だこれあらず。

このような善導の仏者としての生き方に感銘を受けた清沢先生ですから、いま思いがけず病に倒れたけれども、病などに負けるかというような気慨と気迫をもって、学道を続けていく姿が偲ばれてきます。しかしながら結核という病気は深刻でありまして、いくら精神を励ましても、午後になると微熱が出ます。夜になれば、べっとりと盗汗が出るのです。そして死を思うさまざまな妄想に責められますから、病いなどに負けるかという精神の緊張がどれほど脆いか、痛いほど思い知らされるでしょう。それが日夜に繰り返されるのです。

そういう一種の戦いの中で、先生は次のような推考を凝らしていきます。

断肉清独、是れ宗旨の要素なるや否や。祖意を愚按するに、此等は決して宗旨其のものの要素にあらずとの卓見なるが如し。

円顱方袍、是れ宗旨の要素なるや否や。祖意これ等は深く宗旨其のものの真相に関係なしとするにあるか。

懸繒燃灯、散華焼香は如何。（略）

六時礼讃は如何。

五門正行は如何。

称名遍数は如何。

曰く、円頓極乗の宗旨は、唯信一要のみ。此の信発して念仏となり、自然と多念に及ぶも亦た固より咎なきのみ。

曰く勤行不参、曰く精進不守、曰く長髪、曰く遊蕩、曰く衣儀不当。
噫、亦た煩わしからず乎。

極悪最下の機も、前念命終後念即生の深意、夫れ此に至りて首肯し得べきにあらずや。
愚蒙の改悔それ此の如し。穴賢々々。

『保養雑記』にしるされたこの推考と、のちに先生が『当用日記』に「人生に関する思想を一変し、ほぼ自力の迷情を翻転し得たり」としるされている回想とを重ね合わせて理解し、この時が先生が自力の立場を翻し棄てて他力に帰した時であると、ふつう理解されているのです。

しかし私は、どう考えてもそれは適切ではないと思うのです。何故かといいますと、如来を信ずる心が発起する、つまり『歎異抄』でいえば、「念仏もうさんとおもいたつ心」が発起するという体験をもった人であればすぐ分かると思うのですが、この心に目覚めたところには、深い懺悔があります。また大きな歓喜があります。そして何か決定的な覚知があります。そういうものが、この日記の文章には、あまり感ぜられないからです。そもそもまた、古い自我に死んで新しい自己に甦ったというような感動に満ちた体験をいうのに、「愚蒙の改悔それ此の如し。穴賢々々」、こんな文章でそれを表現するでしょうか。一種の定型化した表現を使って、一つのしかしながら、意味深い推考を述べている、そう感ぜられるのです。

その頃先生は、高い志をもって、仏教の真理性を思想的に開顕したいという努力に身を励ましていたけれども、思いがけず肺結核を患う身となりました。その挫折の深い痛みの中で、「自力無功」、人間の力は駄目であるということを、鋭くそして深く思い知った時をもったに違いありません。しかしながら、先生がのちに表白したことばでいえば、

「絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの境遇に落在する」という、あの決定的な覚知は未だしではなかったでしょうか。こう理解するのが、無理のないところであろうかと思います。

三

やがて清沢先生の身辺が騒がしくなり、先生は療養によって小康を得た身をひっさげて、大谷派の改革運動に同志と共に立ち上がります。その改革運動は明治二十九年の秋から三十一年の二月まで、足かけ三年にわたって行なわれ、それなりの成果をあげることはできたのですが、先生は感ずるところがおありであったようで、明治三十一年の春、一切改革のことは放棄するといって、この運動を終結していかれました。このことも、私たちにとっては問うべき問の一つでありますが、この改革運動によって宗門は一つの大きな転機をもつことができたのですけれども、清沢先生もまた、それに相当する代償を払わなければなりませんでした。それが、宗門からの除名という処置でした。いわゆる僧籍剝奪でありますが、何故そういう厳しい処置がとられたかといいますと、その当時の日本仏教の各教団の中で最も専制的であるといわれていた大谷派の、〈教権〉に対する批判を先生が敢えてしたからです。いわゆる法主権に対する批判を、大胆に行なったからです。他のことはともかく、法主権に対する批判を公けにしたことは、当時の宗門としてはそれを許すことはできなかったでしょうから、その責任を問う最も厳しい措置をとったのでしょう。

このような宗門からの除名、そして改革運動の疲れによる病状の進行、この二つのものを清沢先生は、改革運動の代償として得られたのです。その中で明治三十一年の秋十月、先生はよく知られた『臘扇記』という日記に、こういうことをしるしておられます。

いかに推考を費すと雖も、いかに科学哲学に尋求すと雖も、死後（展転生死の後）究極は、到底不可思議の関門に閉ざさるるものなり。

いかにも哲学徒らしく固い文章で書かれていますが、簡単にいいますと、死んだらどうなるのかということについては、何にも分からない。こういうことが書かれているのです。それだけではなく、その頃の先生は日記の中にも〈死〉ということについて、何遍もしるしているのですが、そのあとに有名な次のような文章がしるされています。

ただそれ絶対無限に乗托す。故に死生の事、また憂うるに足らず。死生なおかつ憂うるに足らず。いかにいわんや、これより而下なる事件においてをや。追放可なり。獄牢甘んずべし。誹謗擯斥、許多の凌辱、豈に意に介すべきものあらんや。否な、これを憂うると雖も、これを意に介すと雖も、吾人はこれをいかんともする能わざるなり。

ここに述懐されていることが、改革運動の悪戦苦闘によって先生が克ち得た、人生の現実です。

まず、死生の事に憂え、死生の事を意に介するほかはなかったと、述懐なさっています。肺結核の病状が進んで、しばしば出る痰に、やがて血が混ざる。そのうち、小さな喀血がときどき起きるようになります。こういう日々が続いたら、人間どんな気分になるか、少し想像してみるべきでしょう。昔の日本の青年は、肺結核になり易うございました。私の友達にも、青年期に肺結核になって苦しみ、あるいは亡くなった人が何人かいます。私も中学一年の頃、軽い肺尖カタルになりましたので、さきほど申した微熱と盗汗、そして妄想、これがどれほど人を苦しめるかについては、多少分かります。それが血痰になり喀血になりますと、死を予感し、死の影に怯えなければなりません。当時、清沢先生は齢三十六歳です。人生の成熟期です。宗門の改革運動を背負って立って、全国三万の同志が結集した運動の先頭に立ち、「随分策もあり略もある」といわれた清沢先生が、いま肺結核のために死の影に怯えなければならない。こういう日々が続いているのです。

「追放」というのは、文字どおり宗門からの除名です。「獄牢」というのは、少し個人的な問題にかかわりますのでためらいますが、先生が養子入寺なさったお寺で、実の父上をめぐってご家族の感情が少しもつれ、先生は大変に

辛い思いをしなければならなかった、それを指します。家庭での人情のもつれのしがらみ、先生はそれを『人情の煩累』ということばでも語っていますが、これはまことに厳しいものでして、まず百人が百人、凡夫に帰らされます。人情の煩累に巻きこまれて、凡夫に帰らない人間などいはしません。先生はこの人情の煩累をとおして、自分を黙忍堂臘扇と名のっていかれました。何の役にもたたない、ただ黙って申訳ないと頭を下げるほかに何の能もない男、こういう述懐です。考えてみると、人間を凡夫だと否応なく知らせる「人情の煩累」は、人生の大変有効な教師なのかも知れません。そして自分を凡夫だと知らなかったら、親鸞聖人の仏教は分からないというほかはないものが、あるのではないでしょうか。

その当時、京都府で〈学士〉の資格をもっていたのは、京都府知事と清沢先生ら三人しかいなかったのです。非常な社会的栄誉も得ていますし、尊敬も得、また自負もある〈学士〉だったのですが、その先生が家庭の人情の煩累に巻きこまれた時、一言も発しようがなく、凡夫の姿を曝け出すほかはない。実は私も多少身に覚えがありますので、このことはまことに教訓的だと、しみじみ思います。

安田理深先生があるとき、「清沢先生は名古屋生まれの方だから、やはりレアリストではないかね」、決してあの方はイデアリストではない、レアリストだと、語られたことがありました。否応なくレアリストにならざるを得なかった面もありましょうが、まことに意味深い人生の出来事です。この「獄牢」というものは。

「誹謗擯斥」というのは、いうまでもなくご法主に楯ついて宗門から除名された人、その清沢先生に対するさまざまな非難です。「凌辱」は辱かしめですが、こういうことを先生が日記に書いておられるのをみますと、その頃先生はこういう状況の中に投げこまれて、それを憂え意に介すという辛い日々が続く中にいたことを、思わずにはおられません。あるいはまた「他力の救済」に、

もし世に他力救済の教なかりせば、我は終に迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし。

とあるように、その頃の先生は深い「迷乱と悶絶」の痛みの中に、あるいは「迷倒苦悶の娑婆」に生きる痛みの中に悶えていたのであろうと、思わざるを得ないのです。あまりこのことを強調し過ぎてもいけませんけれども、こういう状況の中で生きることに喘ぐ清沢先生の姿が、この『臘扇記』の文章をとおして、改めて強く感ぜられてまいります。

その中でことに「死生の事」ですが、死を予感し、死の影におののく。これに較べれば「追放」以下の事は、それよりは小さな事件かも知れません。しかし小さな事件ではあるけれども、決して軽くはありません。しかしながら先生が最も憂え意に介したのは、死の問題であり、死んでどうなるのかという問でしたでしょう。これは要するに、仏教が「生死の一大事」ということばで問うてきたその厳粛な問ですが、自分が病気のために死の影に怯えなければならないという、生命の危機的状況に突き当って、清沢先生もまたこの〈生死の一大事〉を問わずにはおられなかったのです。

四

ところが清沢先生はその中で、敢えて「自己とは何ぞや、これ人生の根本問題なり」という問を、発しております。この問がもつ意味が、どうも私には大切であると思われてならないのです。この問は、もとソクラテスの名と共によく知られている、「汝自身を知れ」という古典ギリシャの智慧ある一つの問いかけでしょう。清沢先生はすぐれた「西洋哲学史」の講義をなさっていた方ですから、ソクラテスに連関してこの問もよく承知しておられたでしょう。この問に触れて、先生は「自己とは何ぞや。これ人生の根本的問題なり」と、自分自身の事としてあの「汝自身を知れ」という問を問うていったのです。

その「自己とは何ぞや」と問う自己、それはいま尋ねたように、死生の事に憂え、追放・獄牢を意に介し、生きる

ことに煩悶している清沢先生自身です。その先生が、「自己とは何ぞや」という問を、問うているのです。それについて私思うのですが、先生には決して諦め棄てることのない深い願いがありました。あるいは、高い志といってもよいでしょう。ご存知のように先生には、「仏教者なんぞ自重せざる乎」という、強い訴えがあります。これは改革運動の終り頃書かれた文章ですが、同時代の〈仏教者〉に対する非常に厳粛な呼びかけです。そこに私は、先生の祈りにも似た深い願いを感じます。一言でそれをいえば、〈仏教復興〉この一事です。真宗の歴史にかえしていえば、〈真宗興隆〉の願いです。そしてこの真宗興隆の願いとは、法然上人・親鸞聖人そして蓮如上人と、一貫して真宗を支えてきた歴史的志願でしょう。

明治日本の状況の中で、仏教が旧制度の遺物とみられ、ことに真宗は〈愚夫愚婦〉の宗教といわれて、その権威が地におちている。このような、痛みをもってみるほかはない状況の中に、仏教があったといわれます。そういう中で、清沢先生は一人の仏教者であろうとする覚悟をもって生きた人です。だから先生には、自分が一人の仏教者として生きていこうと覚悟したとき、自分を包んでいる仏教の現実は、その権威が地におちて泥まみれになっているような状況だと見えたでしょう。そうだとすると、あの人類の教主である釈尊の、あの人間解放の香り高い純潔な智慧の教えほかはない。を、このような世の嘲りに任せているその責任は一体誰にあるのか。それは、仏教者と称している自分にあるというこういう気持が、ずっと動いていたに違いありません。つまり〈歎異の精神〉が、です。その清沢先生の歎異の精神が、世尊の名さえ軽蔑の対象とするような状況を出現させている明治仏教界の現状の中で、一人の高い志をもった仏教者であろうとして力を尽くさせたのでありますから、そこに動いている願いはただ一つ、〈仏教復興〉、この志願だけでしょう。何故かというと、仏教が衰えたならば、五濁悪世に生きる凡夫の救われる道が、どこにもなくなるからです。この法然上人以来の、非常に大きな使命感があるからです。僧侶が軽蔑されるのは、いい。しかし、末法の世に生きる凡夫の救われる道がそれによって見失われたとすれば、それは人類にとっての損失であり、耐えら

れないことではないか。だから「仏教よ、真宗よ、興隆せよ」という、祈りといってよいようなものが、先生にはずっと疼いていたのです。身は死生の事を憂え、追放や凌辱を意に介して煩悶しているけれども、その中にあって「自己とは何ぞや」と問うたのは、その最も大きな意味は、その煩悶する身を敢えてひっさげて、仏教復興の志願に生きることのできる主体を、自己において確立したい、こういう要求であったに違いないと、私は了解いたします。

そのような思いをこめて、清沢先生は「自己とは何ぞや。これ人生の根本的問題なり」、この問を死の影に怯える中で問うていったのです。先生はすでに改革運動を放棄する頃から、『阿含経』を読み始めていました。それはちょうど法然上人が回心される前に、黒谷の報恩蔵にこもって一切経を読み直されましたし、親鸞聖人であれば比叡山を降りたのち、日本仏教の出発点である聖徳太子を思いながら六角堂に参籠をなさったという、よく知られた行為があるでしょう。そのように、日本仏教の大切な伝統を形成した法然上人や親鸞聖人は、自分の求道の躓きをとおして、学生ことばでいえば「勉強のやり直し」といいますか、仏教を初めから学び直すという決意をある時期にもち、それを実践した人であったように思うのです。そのように、清沢先生もまた『阿含経』を選んで読み始めているのですが、同じ決意が先生にも動いていたのではないでしょうか。

日本における『阿含経』の研究は、よく知られているように姉崎正治先生から始まるといわれます。しかしその姉崎先生に先立つこと十年、清沢先生は研究的な関心ではなくて、生きることに苦しみながら、しかも仏教復興という、仏教者として棄ててはならない祈りを感じながら、その主体を自己において確立したいと覚悟して、そのために仏教を初めから学び直したいという思いをもち、それに促されて『阿含経』を繙かれたに違いありません。それについて、先生は几帳面な方でありましたから、感銘を受けたことばを日記に抜き書きしながら、丁寧に読んでいかれたのです。よく知られているように、先生は『仏本行集経』を読んだとき、釈尊の出家について涙しながら、

ああ、末世大法の振興せざる、はたして何人の責ぞや。

と日記にしるし、仏教者の責任を改めて自分に問うてもいます。そういう読み方をしながら、仏教のいのちというべきものは、出家をも敢えてする〈修道の精神〉であるという、仏教の根本についての非常に厳粛な教えを、『阿含経』の読誦から先生は学び取っていかれたのです。

いま一つ、先生は親友の沢柳政太郎氏のところでたまたま手にした『エピクテタス氏教訓書』を読み、これから大きな感銘と共に深い感化を得ていかれます。これについても先生は、感銘を受けた大切なことばを沢山抜き書きしていますが、この『エピクテタス氏教訓書』から先生が学び取った知見は、〈不動心の智慧〉と理解することができます。つまり〈如意なるもの・不如意なるもの〉をはっきりと区別して自覚し、その不如意なるものに対しては心を動かさず、如意なるものについては、力を尽くして対処していく。こういう〈不動心の智慧〉というべき知見を、先生はこの『教訓書』から学び取られたのではなかろうかと、考えられるのです。

五

その場合、先生が「意に介し、憂え」ている「死生・追放・獄牢」などの事は、これは不如意なるものであります。思うても、どうなるものでもありません。血痰を吐いたり喀血しながら、結核が治ればいいと切実に思います。そういう病いの身を癒して健康な身体が欲しいと、切実に思います。けれども所詮、どうにもなるものではありません。まじめに宗門を憂え、憂えるからこそその改革を訴えた自分を、何故に宗門は除名にしたのか。それをいくら怨み批判しても、所詮意のようになるものではないでしょう。向こう様がなされたことですから。このように、その中にあって自分が意に介し苦しんでいる出来事は、結句つまり〈不如意なるもの〉ではないか。それに対して、〈如意なるもの〉とは何であろうか。こういうことを、先生は問うていかれたと考えられます。

『臘扇記』の明治三十一年十月二十四日付の文章、これは非常に大切な内容がしるされている文章ですが、何遍も

これを読んでおりまして、いろいろ考えるところがあるのです。先生はこの頃、しきりに〈死〉について思いをめぐらせておいでになります。この日の日記もそうなのですが、あの〈如意なるもの・不如意なるもの〉について思案をめぐらし、その〈如意なるもの〉とは、「自己意念の範囲」だと尋ね当てていかれます。さらにその自己の意念についても、不如意なるものがある。それは、煩悩に動かされた心である。このようにさまざまな思いを託した短い文章がしるされ、そして、「自己とは何ぞや。これ人生の根本的問題なり」と、真に自己であるものが問われていくのであります。

このように先生は、本当の自己といえるもの、それはより自覚的にいえば、さまざまの「意に介し憂える」ものに囲まれたただ中で、あの〈仏教復興の志願〉を実践する主体の確立を求める問でありますが、それをしきりに求め、尋ねていく、その反復する思案であり探求であろうと、私は了解するのです。そういう中で、清沢先生にふと、大きく心を開く一言が聞こえてきたのではないでしょうか。それは何かといいますと、先生は当時すでに『歎異抄』を読んでおられます。その『歎異抄』は、ご承知のように〈二種深信〉の知見を教えておりますでしょう。「念仏の信」、その自覚内容は「二種深信」である。これは曾我先生が『歎異抄聴記』の中で、繰り返し強調なさっているとおりです。もちろん『歎異抄』は、二種深信の中でいわゆる〈機の深信〉といわれる、我が身についての深い、しかしながら決定的な〈信知〉の表白をしるしているだけでありますが、そのいわゆる「機の深信」はそれだけがあるのではなく、同時に必ず、

かの阿弥陀仏の四十八願、衆生を摂受したまう。疑いなく慮りなく、かの願力に乗じて定んで往生を得。

と決定的に深く信知するという、いわゆる〈法の深信〉、すなわち〈乗彼願力〉の深信と一つのものです。

ですから『歎異抄』をとおしていわゆる〈機の深信〉に触れたということは、清沢先生ほどの人ですから、当然いわゆる〈二種深信〉の教えをつとに承知しておられるというべきでありまして、その二種深信の中の〈法の深信〉を

表白することばが、いま尋ねたような状況の中で真に自己であるものを探求し、思いをめぐらしている先生に、その探求を解く一言として改めて響いたのではなかろうか、こう私は想像するのであります。重ねていえば、先生にことに強く、あの「乗彼願力」の深信を語ることばが響き、このことばに先生は大きく心開かれるものをお感じになったのではないか、ということです。それが日記の中で、「自己とは何ぞや。これ人生の根本的問題なり」と問う問に対して、

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの境遇に落在せるもの、すなわちこれなり。

という、あの決定的な知見を開いたに違いない。私はこう了解するものであります。

「乗彼願力、定得往生」というのは、善導大師のことばです。そしてもちろん親鸞聖人が、本願の信の大切な自覚内容として了解なさっている、その知見を表すことばです。このことばに、おそらく清沢先生は大きく心開かれるものを感じ、そこに「絶対無限の妙用に乗托するもの」という、決定的な覚知を得ることができたのではないでしょうか。

自分なりにもう一度このことを尋ねてみますと、死を予感し死苦を感ずる中で生きること、それはとても辛いことです。それから「追放」以下のことは、これは具体的な事件ですから、その中に投げ出されれば人間、煩悶憂苦するのは当然です。切実な思い悩みの中に、喘ぐのです。その自分の生命の全体が、この「乗彼願力　定得往生」の教言に触れて、画然と心開かれた。この哀れな生の全体が、絶対無限の、すなわち如来の大きな力の中に、全面的に生かされているのではないか。こう気がつく時、そういう内容をもって〈真に自己であるもの〉を獲得することができた、まさにその時を先生はもつことができたのです。それこそが、エピクテタスのいわゆる〈如意なるもの〉としての「自己の意念」でしょう。ほぼこのように了解して、私は誤りないであろうと考えます。

『歎異抄』によれば、われわれの心の中に「念仏もうさんとおもいたつこころ」が起こる、これが如来を信ずる心の発起する相です。それに呼応して、先生の晩年のことばでいえば、「我は如来を信ず」という形で信心の発起は体

験されるのですけれども、しかしまた、一心帰命の信の自覚内容は二種深信であるという見解によっていえば、わが身を「罪の身」と知るその信知をもった時が、信心確立の時にほかなりません。あるいはまた、生きることに傷つき悶える私の生命の全体が、「絶対無限の妙用」に根源から生かされている、こういう眼を開くことができたその時こそ、信心確立の時であるということができます。「乗彼願力」の信知が得られた時こそ、疑いなく如来を信ずる信念が発起した時である、こういうてよいはずです。

そうすると、清沢先生は、

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの境遇に落在せるもの、すなわちこれなり。

と表白なさいましたが、そこにはっきりと述懐されているように、傷ついた自分の生命の全体が、如来の大きな力の中に全面的に生かされていると気がついた時に、「この境遇に落在せるもの」という決着を得たのです。「この境遇」というのは、死生の事に憂え、追放・獄牢を意に介して生きなければならないという、その人生の状況にほかなりません。その中にあって、そこに「落在する」、つまり、これが自分の人生かと全面的にそれを受けとめ、引き受ける、この力を得たのです。自分の切実な希望としては、健康でありたいと願う。平和な家庭が欲しいと願います。けれどもそれは夢に過ぎない。現にあるのは、結核のために死を予感しておののき、人情のしがらみに巻きこまれて頭の挙げようもない、そういう人生です。その中で煩悶し憂苦して生きるほかはない自分。しかしながら、その人生が自分の全てであり、それ以外の自分はありようがない。こういうような覚悟を得、その覚悟に立って重い生の現実に堪える。それを先生は、「この境遇に落在する」と語られたに違いありません。

そのような重い人生の現実を、これが自分の生きる人生の全てだと引き受けるその覚悟が、「乗托妙用」の自覚に目覚めたとき、同時に恵まれるのです。ある視点からすれば、大変に消極的な思いだといわれるかも知れません。しかし清沢先生が生きて苦しんだ人生の厳しさを少しでも知っている人であれば、この覚悟を恵まれたということは、

大変に大きな恩恵というべきだということが分かるでしょう。何故ならば、先生が意に介し憂える事件として挙げた中の一つ、例えば「人情の煩累」という「獄牢」の中に投げ入れられたならば、われわれはもう手も足も出ないのですから。そういう重く厳しいものが、しかしながらこれがわが人生かと、安んじて全面的に引き受けることができるというのは、これは信念のもたらす大変大きな恩恵であり、利益であるというべきであります。

それに続いて先生は、

死生の事、また憂うるに足らず。

と表白します。おそらくこれは、生きるも死ぬも如来のいのちの中だ。死ぬ時が来たならば、安らかに死ぬることができる。そういう覚悟をいただいたということを述べたことばでしょう。このように、「死生の事、また憂うるに足らず」ということができれば、それより小さな事件は、ものの数ではない。こういう大変に腹の太い確信を恵まれてきたのです。

ただしそのとき、先生は、

否、これを憂うると雖も、これを意に介すと雖も、吾人はこれを如何ともする能わざるなり。吾人は寧ろ只管、絶対無限の吾人に賦与せるものを楽しまんかな。

と、こう語るのです。いかにもレアルな覚知ですが、これについて例えば安田先生は、その時清沢先生は、あれほど自分を苦しめ脅かすものとして迫っていた死を、「わが友よ」といえるような心境を得られたのではなかろうかと、語っておられます。

六

ところがこの表白に続いて、清沢先生は次のような知見を述べていきます。

絶対、吾人に賦与するに善悪の観念を以てし、避悪就善の意志を以てす。吾人は喜んでこのことに従わん。

先生が「絶対」というのは、これは自覚の内容です。「乗托妙用」の自覚を得たものが内観するもの、それが絶対つまり如来であります。この「絶対」の自覚のないものは、「吾人の与にあらざるなり」、つまり共に語ることはできないといわれるのですから、いかにもきっぱりとしております。如来への目覚めをもたない人は、共に語るに足りない、話にならぬ。少くとも如来を信ずる心に目覚めた人であるならば、その時改めて「善悪」の何であるかを知り、悪を避け善に就きたいという意志が、自然に動いてくるのである。そして、「吾人は喜んでこのことに従わん」という意欲が、自然に動いてくるのであると、先生は表白していかれたのです。こうして「乗托妙用」の自覚を得た清沢先生は、直ちに「避悪就善」の意志に喜んで生きようとする〈意欲〉をもった人になっていきます。

その時先生は、「善とは何ぞや、悪とは何ぞや」という問を、改めて問うのです。これについては周知のように、『歎異抄』に、

善悪の二つ、総じてもって存知せざるなり。

という親鸞聖人の知見がありますし、清沢先生もまた、その人生の悪戦苦闘の中で、

何が善だやら何が悪だやら、一つもわかるものではない。

と述懐なさっております。要するに倫理的というか、ふつうの意味でいう善悪、つまり仏教の智慧に立たない、凡夫の立場において善とされ悪とされているものに破れたという、痛みをもった人であります。だから「避悪就善」といった時、その避けるべき悪とは何か、就くべき善とは何かということを、当然吟味しなければなりません。この時先生はきわめて単純明快に、

吾人をして絶対を忘れざらしむるもの、これ善なり。吾人をして絶対に背かしむるもの、これ悪なり。

と示されます。つまりわれわれを如来に向けて生きさせるものが〈善〉であり、如来に背かしめるものが〈悪〉であ

るとしたのです。このような、信念が改めてもつ独特の「善・悪」の観念を立てて、一たび人が信を得たならば、如来に背く生き方を破って、自然に如来の仰せのままに生きていこうとする意欲を生み出すのだと、表白していかれました。

いま、「如来の仰せのままに」と申しましたが、先生がのちに語られたことばでいいますと、例えば「至誠心を尽くして仏の命示を領すべきなり」といい、「自信教人信の誠を尽くすべき人物」と語っていますが、こういうことばで語られているものが、〈就善〉の意志の具体相ではないでしょうか。そしてこれらのことばで語られていることに内容を与えれば、先生自身が一人の仏教者であろうと願いながら、先生が身をおいた明治仏教界の状況の中でいえば、〈仏教復興〉を強く願ってその力を尽くしていく、この実践にほかならないというべきでしょう。先生は書きしるしてはいませんけれども、「自己とは何ぞや」という問を敢えて問うていかれた、しかも破局的な人生の状況の中で。それはいま尋ねたように、一人の仏教者であろうと覚悟した人間として、本当に真剣に仏教の宗教的生命の回復を願ったのですが、その志願の実践に堪えられない弱い自己が、はからずも曝け出されてきたような状況です。その中にあって、棄ててはならない仏教復興の志願に敢えて立つその主体、その確立の自覚を、先生は「乗托妙用」の自覚を得た時に、摑んだに違いないのです。

この自覚を先生は三十六歳の秋に得られたのでありますが、ほどなく四十一歳の夏、その短い人生を終えました。信念の確立を得た先生に残された時間は、ですから僅か五年間であったのです。その五年間を、清沢先生は「我、他力の救済を念ずる時は、我(われ)が世に処するの道開け」と叫び、仏教復興こそわが願いだと訴えて、まるで疾風が通り過ぎるように、明治仏教界を駆け抜けていかれたのでした。そして「我はかくの如く如来を信ず」という信念を世の人びとに語り捧げて、僅か六年のちに命終えていかれたのです。それを思うにつけ、私は厳粛な思いを禁ずることができません。

七

清沢先生が大谷派の僧籍を得たのは、先生が十六歳のとき、育英教校へ入学するためという、実際的な事情によってでした。ですから先生は、向学心のために僧侶になった人です。明治維新のあと、生家が非常に貧しい状態になり、しかしながら向学心に燃えて勉学の道を得るために、本願寺の育英教校に入り、それに必要であったので僧侶となったのです。しかしながら、一たび真宗の僧侶となったからには、まじめな僧侶になりたいと覚悟なさいました。僧侶とは仏教を学ぶものである。その限り、釈尊の教えのいのちに目覚めたい。この覚悟に促されて、猛烈な勉学が始まっていったのですが、いくたの紆余曲折を経ながら、しかしながら先生はその心が晴れるという時が、容易に得られなかったのです。その先生がついに「乗托妙用」という晴天白日のような自覚を得られたのが、三十六歳の時でした。ですから信念の確立を得るために、自覚的求道が始まってから実に二十年の歳月が流れています。そしてその信念に力を尽くして生きること六年、二度にわたる大きな喀血のため、四十一歳でついに命終えていかれたのでした。

先生の終焉は、喀血のあと身体が非常に弱られまして、ずいぶん苦しい状態の中でであったと伝えられています。その最後の時、お側にいた原子広宣氏が、「先生、もう駄目です。何かいい残されることはありませんか」と尋ねたのに対して、先生は「何もない」といい、「苦笑しつつ呼吸絶えぬ」と伝えられています。「苦笑しつつ」、清沢先生は何故苦笑しつつ命終えられたのであろうか。実はこのことが、以前からずっと気にかかっておりました。そして数年前にやっと気がついたのですが、先生は本当は「にっこり笑って」亡くなられたのです。「先生、いい残すことがありますか。」「何もない。」そしてにっこり笑って、呼吸が絶えたに違いないのです。ただ先生は喀血のために、寝ているのも辛い、起きて座るのも辛いという状態であり、肉体は死に瀕して文字どおり苦痛の中に喘いでおりました。その人生の最後に「何もない」といわれたのは、自分は如来を信ずる心に目覚めることによって、尊い人生を生きる

ことができた。その私が、いま寂滅の時をいただくのだ。これで私の生命は完結するのだ。その心をこめて「何もない」といい、にっこり笑って命終えられたに違いないのです。ただ、苦痛に喘ぐ先生の肉体は、笑顔にならないで、苦笑する顔に見えてしまったのではないでしょうか。それで、「苦笑しつつ呼吸絶えぬ」と伝えられたのであろうかと、思います。

金子大栄先生はしばしば、「完全燃焼」ということを語っておいでになりました。いま改めて清沢先生の人生を思う時、文字どおり完全燃焼の四十年であったという感銘が動きます。しかもその人生のちょうど半分の二十年を、先生は如来を求めての悪戦苦闘の中で過ごされたのです。仏教復興の志願に立っての実践が、「命百千ありてもなお足りぬ」といわれたように、重い努力の連続であるとするならば、如来を求めての求道の悪戦苦闘は、「一生かってもなお足らぬ」と呟くほかはないほど、容易ならぬ道です。その清沢先生の求道する人生をみる時、私たちは信念の確立を求める求道を軽くみてはいけないことを、つよく教えられます。清沢先生はselfish egoism つまり「自己中心的なエゴイズム」ということを語られていますが、それが〈凡夫〉であるものの重い障りでしょう。そういうものをもって生きるほかはないわれわれが、如来を信ずる、つまり「乗托妙用」という根源的覚醒を獲得することは、いま申したように、人間一生かかってもなお足らないといわずにおれないほど、容易ではない一大事なのでしょう。

考えてみると、それは親鸞聖人が信心の獲得について「難信」と語られたのと、全く同じ意味です。だから信念の確立を求めるこの「生死の一大事」を、もし軽くみる人があれば、それは不真面目です。生きることに不真面目です。そういうことを、先生の厳粛な人生をみるとき、私たちは思わないではおられません。ともかくそのようにして、一生の半分を、先生は如来を求めての悪戦苦闘の中に生きていかれました。そして三十六歳の秋、ついに、

自己とは他なし。絶対無限の妙有に乗托して、任運に法爾にこの境遇に落在せるもの、すなわちこれなり。

と表白される、画然とした目覚めを得られたのですが、私思いますに、その時先生はこの自覚に立つだけで終らない

で、この「乗托妙用」の自覚がさらに先生を「避悪就善」の意志に目覚めさせ、「喜んでこのことに従わん」という意欲を、先生に生んでいったのです。この意欲に促されてそれを具体的に実践していったのが、仏教復興にいのちを捧げた最晩年の先生の数年間の人生であったのです。浩々洞の精神主義運動、あるいは真宗大学の東京移転・開学は、その間に先生が果していかれた非常に大きな歴史的意味をもつ仕事であったと、承知しておくべきだと考えます。

その姿を目の辺りみていた多くのご門弟の一人、曾我量深先生が改めて、清沢先生が「乗托妙用」の自覚を内容として「我は如来を信ず」と表白していかれたその信念は、親鸞聖人の教えにしたがうならば、「一心帰命の信」と了解すべき大きな信仰的自覚であると、聞きとっていかれたと思われます。しかも「一心帰命の信」は決してそれにとどまることなく、自然に必ず「一心願生の信」として生きられ、相続していきます。ですから清沢先生がその信念を、「乗托妙用」の自覚から「避悪就善」の意欲へ展開して表白なさったのは、「一心帰命の信」は必ず「一心願生の信」として展開していくという了解を、改めて曾我先生に促したのだと考えることができるのです。

一心願生の信とは改めていうまでもなく、「一切の苦悩する衆生と共に、安楽の国に生りたい」という、広大無碍の志願であり意欲であります。この志願に呼び覚まされて、「喜んでこのことに従わん」と、恵まれた願生浄土の自覚道に、喜びと共に自分の人生を捧げていく道をいただいたのです。凡夫のことばでいえば、自分の業を果たす道をここにいただいた、こう了解すべきあの「願生浄土の自覚道」を、清沢先生はそういうことばを使わないで、『臘扇記』にしるされたように、「避悪就善」の意欲という、素朴にして率直な表現で教えて下さったのであります。このような了解が曾我先生において確立し、浄土真宗の積極性は〈一心願生の仏道〉にあるという知見として、現在の私たちのところにまで届けられたのであります。

親鸞聖人が開顕なさった浄土真宗、それはどのような性格をもつ仏道であるか。この問に対して、願生浄土の志願に目覚め、喜んでその願生浄土の道を生きようとする意欲に立って生きる人生、これをいうのだという知見が、この

ようにして早く清沢先生によって身をもって示され、曾我先生によって思想的に明らかにされてきたのであります。

まことに粗雑なことを申し上げ、お耳をけがしました。清沢先生が獲得なさった信念の表白が、よき後継者の一人であった曾我先生に、いま申し上げたような真宗理解の知見としてうけ継がれていったのです。そのことが、私たちが真宗を学ぶ時の大変に意味深い道標となってくださっている。このことを強く思いましたので、そのようなこととして、清沢先生の信念の表白を尋ねたことであります。

今年の臘扇忌にあたり、皆さまと共に清沢満之先生のご苦労、そして恩徳を偲ぶ時をもつことができましたことを、大変有難く思うことでございます。

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。